俳諧發句題林集

[illegible]之部

911.3
八

俳諧発句題林集雑之部

賀 祝之部

闌更 選

東蓋 輯

有難き姿え拝まく

蓬莱や絲の中から山の雲　来山

呉洋子五十歳賀

古き事問ふやきのふの緑　梅竹

山招氏母堂九十の賀

蓬莱を云ふ御鏡や梅嫁　仝

百歳の賀

口なまし百や榧子のちなみ哉　太祇

玄水七十賀

若菜つむほとり孫友や春の水　呂波

笑白房猫ニ而茶即興

花笑松といふ題にし

茶の春や梅の匂ひむ小まつ原　言水

數賀

筆小弌宝ともや努家乃春　曉臺

烏臺の図子

清けなる春の標も竹の春　仝

八十賀

梅柳八十うつしもと寿う筆　仝

ふたつひ家のまよゆりて

苔ハ根を我子孫への地とれさり　仝

瑞氏の室六十の賀

よわきもん桃と王母か気さるむ　仝

梓裏七十の賀

千代侍よふ親も親なり芋瓜　仝

惟韵か家業めでく

花に来て家ハ親のたつしまる　仝

呂波の家業まて

行春や白き花見ゆる垣のひま　蕪村

何ゝたる居ともしらずけり

絢垣衣(シノブ)蚊帳つりあへぬ住居かな　仝

某子病後ニ二の姿見てゝ小

涼し人ゝく日枝を二十の化粧かな　仝

斗文父の八十の賀す申す

稲かけて風もひかさし老の松　仝

大魯か病の復常を祝いのる

痩脛や病より起る鶴寒し　仝

ある人の別業にて

雲雀鳴音を揚て中宗底か　梅竹

竿桂宗匠にゆきて

菜胡日よこてや雲の淡路島　淡々

正名の世を譲りしに

田も畔も筆にかゝる稚と譲り草　仝

女婿の見舎初て

よし見年後米舎初の年の稚　仝

大圭宗匠か母の

千乃句は雲に何り冬能月　仝

家声祝

神祇

巧婦鳥きえて飛すや出雲の社　仝

聖廟

其中小社もみまゝの梅の月　宗丈

熱田踏歌

梅か香や鼻まて通る笏拍子　嘯壺

伊勢法楽

幣とりて寐ぬ間の夜さむかな　淡々

大社のまへを拝して

拝までやるる聲や泣く初神楽　仝

神主か和布かる人や貝杓子　沾徳

兵庫七文の禁礼に逢て

此ほと桜御輿にたまらん禁の郷　大舅

紀久日詣家

若菜や伊勢飛日影の夕境　淡々

天満宮奉納

梅咲や白くも流るゝ太宰府　梅竹

大神宮に詣て

神の梅花より高き白ひ哉　其角

熱田にて

涼太夫の声さへ川こそ春霞　路通

白山奉納

神の松雪乃葉ごしに光りけり　宗旦

室の八嶋

烟さへくえしき室の茂り哉　仝

天満祭

夜々秋の通り河原すゞ涼船　淡々

さい祭

裸身干し太刀涼しさい祭　露川

奉納

天満る声や流しして白牡丹　晴雲

笠置の連歌

眩笠[illegible]白もきて神の連歌哉　一翁

社頭翫月

翫月や一夜の松乃梢より　大舟

康嶋

乙女子が清衣ふりて神の石　晴雲

海村の夜まて

火燃もし[illegible]神も寒さん有雪　宗旦

[illegible]

回廊に汐みちくれは鹿そ鳴　素堂

和尚におくりて

清海に居ならし和尚の浦　其角

時めくや家に兀る鬼女の面　宗旦

住吉東林寺

立波にしろくきえてる庭燎かな　舞兵

釋教

鶯や八角堂経のさほりけ　淡々

蓮も清寺乃鼓の入りうち　其角

山中の辻堂にて

千日の梅さき出ぬさゝき哉　嘯山

知恩院にて

町中に櫻わけ入や知恩院　宗旦

芭蕉堂にて

時なれや花の中なる翁堂　仝

身延山

撰録而乃経蔵水の音　淡々

晋子の狂句によりて

花乃都小坊主小角ハ笑ひ見　蕪村

高雄

桂やふりし牡丹にむかふ妻の情　嘯山

梅杉てらし嫁娘に包て朝森で　由栄

家竹亭

若竹の子しも見えぬ無路で　可敬里

家水亭

水無月の名よき嬉し君か顔　化良

家蛍亭

奈良団も情ありての面　可敬里

家菊亭

京に余所にもきく紅りかな　仝

戀

みたれ髪も出さで有明寒さかな　蕪村

梅さくら紅や念珠と掛ならへ　仝

門さして狂僧つゝしめ小紅葉　嘯山

思ひ路の山吹かゝる髻の郎　仝

家橋亭

浮橋は君も夢みんまよふ宵　車蓋

家鳥亭

若しく鳴てやむあん君か宿　化良

春宵恋

死なくゝある杖よ菓乃梅哉　一瓢

寄古恋

恋過しと鳴きこの宿に鶯かな　東蓋

思ひ泣衣紛れて名残下さり　仝

寄露恋

露霜しも衣哉今に現るる　仝

閨怨

尊破を今宵やふれてあくす　大魯

離恋

穀りせや衣は哉旅を妹のもと　蕪村

離恋

よし野哉横に出てなきて恋路かな　漢甫

寄琴恋

待恋や臣縫の上乃龍に琴　仝

寄附る恋

きりしや君に附るるなかれ　一瓢

無常

哀傷桜

亡母野送

目に入る紀行乃まどや夕桜　曉臺

あ焼り今や骨ありし肉なくし　嘯盃

收骨

骨肉なし目にかりまつくねたさこ　仝

御葬礼

御車八葉の月夜乃なくさめか　兎尹

髑骨

なくてはなる扇の骨や秋の風　素堂

白骨の露ふこまる多野哉　路通

悼

亡父三十三回忌

あんなきまて蟋蟀（ウナギ）のま春かな　嘯盃

亡寡馬一周忌

花鳥の中もたれは八めてる心　仝

琴の音の茶毘ゆまて

かくはかり湯芝も胸を割ものゝ　仝

朝貢の挽歌

手向とまる棺もありて書やらん　仝

鳥尾の芸芸まで

逢ぬとしみ血を吐のところ哉　仝

女子を失へつる沙弥をいさむ

古うたも目なくあつてこそ又あらむ　仝

丈到　女まうりかな子

我二日分我ゝく風も吹きハ吹く　仝

亡妻七回忌

膝もとで我顔ても見んてし恋系ふ　宗之

梅竹叟悼

硯ちとこおこ見への月我見ん納めぬ　石波

四十二回忌

乙沸茶や霜とぬれて月我茶　仝

嵐雪梓忌

玉集子碑ふるふ十夜我ん命　仝

仙霧追善

第一ゝ念ときまとまと我阿弥陀仏　仝

遠忌

梔柳見え度孫乃光りる　滋之

玉角一周忌

一年我隣ト髭紫けし春の水　仝

才麿ゟ娘　女まうりかな子

家我耕く一束もとえん仏竹の家　仝

亡母正當

花節が今も枯れし羽根揃鳥　太舟

六ツになる子我先へる子

ゆてさく秋の暮六ツ哀なり　仝

母身まかりけるに

身に冷く更衣しき卯月かな　之角

名人の鬚さへたし秋の暮　仝

妻にをくれける人に

敲帳にろくぬし着ぬる夜の衣　嘯風

亡妻

まほろしに痩顔見えて梅の花　標良

亡父乃梯をとめし魂祭り　仝

東山の身まかりける子

岩にかゝりての秋さへ暮られぬ　鬼貫

同妻悼

花の葉ほと系衷更乃砧

里まつし八月能つまくる波

隠士人の妻乃枕の書

しつかな蚊表とは秋とは今を世　仝

之角母悼

眉ふりし見るまた向ふ杜若　沾徳

晋子が悼

霧の月消きりふ二所あり子　朱山

其子が失て

春の艸木の遠ぬかるかしれ　仝

悼

かへりては見るぬる泣や友千鳥　素堂

母の忌日高野山に登りて

親しらぬ我子年々の花さかり　路通

子に別るゝ人に

竹の子の連にまかする時鳥　天垂

逝者

かきりなく六十にて秋をと鳴けり　文九

六月三日相國信長公二百年忌

起ろやむかしのふるき尾張にて總見禅寺

小織法供養とおなじく桃の花逢ふ少て

みな乃佛法鳴雷さへ若葉哉　嘯山

晋子が三十三回忌

樽盃乃くろさへあらむやちる花哉　蕪村

述懐

懐旧

晋子七十年懐古

夕ざれや人ハ更て行むらしぐれ　几董

夕霧の塚にて

此塚も柳なくてもあはれなし　鬼貫

福原にて

菜畑乃こゝだと聞桜かな　素堂

元政上人の跡を尋て

あなくとも竹にあるまし桂乃露　蝶夢

野田の藤など世にいはれしも

みじかくて花もかるし野田の藤　補天

難波女も久し花名し野田の藤　蝶夢

宗長か墓にて

あらぬ此三月志れの石乃銘　沾徳

元政上人の旧跡

月雪に竹三竿を主かな　大魯

懐旧

牡丹折し父乃怒りなつかしき　仝

述懐

積ても出れ雲も遠き木綿かな　淡々

往来もなくて雲ゐの梅かな　仝

香も来れ咲やり本の柏乃葉　仝

懐古

大坂や霞まはゝし小夏の雲　嘯山

木曽殿古城

氷ハ日秋西子落くり秋乃聲　仝

足柄城の古き

秋涼し松にむかしの足摺　仝

當麻寺の塔にて

むかし秋青や美人の誕生かな　仝

菜日遊大津旧跡

久々の菜も越世乃都めくらむ　仝

双の岡にて

芸と我と家と樹乃影二人　仝

剃髪

剃捨る髪に寒き秋しくしら　宗文

馬角か剃髪二本樹にて

従ふゆるゝ梢を惜乃小川かな　蕪村

剃捨る髪やうつしも父の霜　一音

丈せ之か雑髪り

髪乃落尽るハ涼しき見るかな　嘯山

病中之句

寐ゝ語る人だに逢ふ時雨る　淡々

聖ぞしぬ寺試樓さする餅の下　素秋

丙日乃枕に何とかん今胡の秋　大曽

きらびやかにそめるもぬ秋の風　標良

五月雨ゝ乃太刀さへもり文衣　来山

讃

柳に燕の画に

花の酔さましに来るか夕燕　嘯山

悪にも福禄寿に

杖も捨てこそや蓬莱我山捨てし　仝

竹に木兎の画に

つくづくと何おもふ竹の月夜　仝

馬乃絵に

新茶にも餅八番好す子深川　治徳

糸桜の画に

好きなくてこゝろふ常や糸桜　蕪村

小町の讃

涼風や何ちりく向ふ古姿　鬼貫

九山のおさなき悪とかしつしくるに

讃さよし書ミ八千代八仕官縣令の

地下て栄利をもとめんよりハしかし
尾を泥中にひかんには

銭亀や青砥もしらぬ山清水　蕪村

探丸大先人讃

ゑうてふむかしまくや秋の暮　仝

武者絵讃

御所柿にたのまれ貌の案山子かな　仝

丸山か黒き犬をゑかきたるに

己か身の闇より吼て夜半の秋　仝

鬼の画に

かさくと我をまきたる秋の風　樗良

きぬの火をともしたる画に

小町の花白ふ火桶の宮女かな　蕪村

問答

ある隠士我もとへきて

古庭に茶筌花さく椿かな　仝

嘯山か伏見に帰るに携へ行哉
訪ひて

黄檗林を出て嘯臥峰の梅人　仝

雅因か閑居を訪ふ

山風や書なき寺の枕とて　蕪村

入門の維風丁当日よ

たゞへちる紅ゝ花もなし　嘯山

笠菴禅師の隠栖を尋て

水さむし梅の中行座禅林　梅竹

浪花の一本亭に訪れて

粽解て蘆吹風の音ながら　蕪村

陸奥の更衣に茶庵を訪たれて

茶湯ても枕さがさよ瓦さくさき　仝

一書生の閑居を訪ふ

学問は尻からぬける蛍かな　仝

行ふ人乃茶王に枕て

御をもてゝ牡丹をめぐる主かな　屋舟

紆住菴に嘯山が旅宿をさし訪

訪ひく

九魚の梅よむしる青すゝき　蕪村

東山下有一茅半宇

嵐雪とふとん引あふ佗寝かな　仝

南坡菴を訪て

たゞしろき庭や花散て中食なり　宗文

一草亭再会

氷柱なき影にふりさし入日かな　宗丈

本堂の草庵を叩て

寒くしも戸さゝぬ庵乃松の月　仝

餞別

御下清風は東関乃ゆくまゝ　尚別

菖蒲君を携ふ車芸に送る

のろくに乃んするを花を二の雲　仝

尚二句

いされんく魂去て深ゆまて　仝

ほとゝぎす又啼く東へ添生山　仝

頼貢都に帰るに

花送る岩に角なし能花山　嘯意

尚二句

和歌山ふき能く藤　愚之　仝

ある人の東行を送る

立木草と待つ清坂乃遅桜　仝

北混東武ゟ帰るを送る

華鶏や一るのも見送るの山　淡々

送る

一草亭再会

氷柱なき影にふさし入日かな　宗丈

芋萱の草庵を叩て

宵くりも戸さゝぬ庵乃松の月　仝

餞別　留別

御下清風子より東関乃くにゝ

舊識の客を携り小車芋萱を送る

ゆるくと乃んするを花と二の雲　仝

留別二句

いされん魂玉よ降る乃まて　仝

ほとゝぎす又聞ことありん弥生山　仝

故真都に帰るを送る

道を越路とく岩に角なし鈍菜山　嘯吾

留別

桃の山ふき流く藤　愚之

ある人の東行を送る

忘木草と待り佛坂乃遅桜　仝

北混東武に帰るを送る

菫翹や一ゐるも色あせん川の山　淺く

餞別

汐干てきのふの川を越る人　素堂

翁の行脚を送りて

此川のまもし小東と見ん菜の花織　仝

恭里が東武に赴を送る

嗚呼ましいさ先に都鳥　蕪村

留別

時鳥花の東路を出る旅　樗良

雲裡坊年橋立にくだる

みしか夜や六里の松に更たらん　蕪村

東武の人を大津の駅に送る

頓て萩や二ツ河まりく志賀の松　仝

留別四句

鹿菜かるかなしく羅くれ人　菜文

名残多し我もよし田を出る時　仝

萩しきる里を極後る時なれ八　仝

使ゐきん月に二尺の硯石　仝

餞別

さしの涼しさ告し東風　来山

たらし夫婦隔かき春のわかれ

さふきふや皆の背出るとく

巨燵出て早あしもとの野川かな　蕪村

友人に別る

木曽路行ていざ年よらん秋独　仝

当麻二句

練物の立日も遅し二上山　宗文

語りし見らぬ朝戸出さる道かな　仝

紀行

川中島

川鳥や若菜芹なく日ハ斜　仝

宇都乃山

よし野出て一日春をしのびけり　嘯山

能麻峠ハ伊勢へ近し宿とる

雲の上に流れて行も吹雪桜　仝

飯貝吉野の里越路て後し有山

遠かれど妹なり背なり

きさえてゐ色として

山鳥の尾のしだり中越に野川　仝

木の流より芽出小あぶ

桜ちる春日も宗し孤子たち　燃升

桜ちる跡の木もさくら後しさ　文九

西行谷にて
墨染乃雲に松の苔の花　素阿

家島にて
花散て萱も松葉にまよひさへ入ぬ　保世

湖上の吟
霞漕ぐ三井の扉のなかに入ぬ　曉臺

伏水桃山にて
桃のうく花ある所水長し　仝

住よしにて
春風や白浪白し松の中　東山

墨染を過るとて
春寒し伏見の花の居酒屋　田福

几董とつきの渡りを往にて
菊遠し萌黄より萌黄哉　蕪村

笠田にいりて翁の碑をとふ
稲原も猪しての名の清水　宗之

よしの川
桜見ぬ先より嬉し吉野川　甫尺

よしの山
志ら雲や花の時分の吉野山　黄太

よし野にて一生を勤すまし　東湖

三芳野や花盛く天乃原　梅竹

二日にて吟さる花のよし野ふ　几董

芳野山是花芳野水是花と以ふる

心ある句にまたまたく

咲みちて花雲の中より芳野山　車蓋

箱根山越る朝の友ふやます

口すさみたもとにはさむ哥ともきれ　蕪村

墨摺ふく

墨摺や卯木のひゝきと追出す　嘯庵

木曽を越く

夕立に橋なき涼し浅乃山　素堂

旅宿を出て

河ぞひのや花藤を眺く橋の下　仝

江の島弁天

島涼しまほらち合す人の月　朧竹

身延の吟

涼しさや高さ三尺ふ二乃滝　渓亡

不尽山の辺

雲霧を中ゟ入や富士山　宗見

稲乃穂に稲妻つゝむ夕かな　嘯壺

玉は島

いかしき格よかゝりし梢の秋　三雄

十四

らうたくよし四通ミ八二階かゝ　鬼貫

虎渓茶今は冷し石乃机　仝

宿貸人に刀かけ出せ稲妻や　花村

旅行の苦

粟飯にまじる八似たり女郎花　照川

桜もろ乃や行倦ても花盛り　風水

行路花に狂ふ

夜ミ桜やんまも飽きうし　大音

妙義山にて

出しけり峰の志ら雲吹かな　嘯壺

良夜峡中望士峯

高根をまくらし月は光かな　仝

偶因門

日本をまくらとして鶏鳴　仝

妙義山

上総望陀

秋の絵に稲妻つゝむ夕かな　嘯雪

玉は崎

あれしき穂なからし梢の那　三雄

よし田

うらやましく四通ある二階かな　鬼笑

鳧啼や今八合目石の肌　仝

宿賃に刀かけ出る時雨かな　花村

旅行の若

粟飯にまつとも似る女郎花　桃竹

桜とも見ゆ行倒れても花盛り　風水

行路荒に脇より

夜さらや桜さんまでも眠きかな　大音

妙義山すぐ

ゆくさしし峰の来る雲を吹くかな　嘯雪

良表岐中富士峯

高根までく行月雨光かな　仝

偶因門

日もすら表から額をとさして雁鳴る　仝

妙義山

しら雲やふもとは花の霞から　宗文

衣ヶ崎にて

かくれなきみづうみの波の上ニ　仝

一本花又ハ天の柱といふ

雲の峯天乃柱の木立　仝

廿二日之橋

茶雀師を訪ひとて

巣雀も鬼の子も見ぬ九条かな　仝

円光山にて

春立日うつゝもてる庵居哉　仝

音光寺

まち／＼家も法乃光りかな　仝

天のはし立

橋立や音も神なく八波越ん　仝

送る

旅ハきそて古小卧日もたの由く　仝

舟の図ニ

舟乃図名残りき橋とくる夜かな　晴雲

東武小峰のう身罷りぬと聞て

花乃香や霞も百里ハ遠からん　仝

松風を四十まで聞て騒しけり　鬼貫
さわらくと叢へ淺き大井川　仝
身延七面
月花も神も数ある面かな　宗丈
上の諏訪
しけむれてゆやふる社の神の數　仝
雑之部
生死涅槃
さくし見えて見えける涅槃かな　蝶夢
禅林

あかよりはすゞしき秋哉　宗六人
蕉中の吟
春雨や猶書ぬ身のあはれなる　蕪村
暁にのぞむ
丈山の口が過けり夕涼み　仝
去夜より見ちまて
日は中に能て厩ある寒さかな　仝
髭妖海
岸雨ふるやけしの花の寒さかな　呂波
二軒茶屋にて

松風を四十年きゝてさを騒かしれ　鬼貫

志よろしく岸ハ流るゝ大井川　仝

身延七面

月花の神も数ある面かな　宗文

上の諏訪

しらむ江やふるきの神の数　仝

雑之部

生死涅槃

おもしろき世をまてみて涅槃かな　禅弁

禅林

あらはにもすかまあらそふ蛙かな　宗文入

蕉中の吟　一

春雨や抱書ぬ身ハあはれなる　蕪村

時なりと申む

丈山の口が過たり夕涼　仝

まゝ夜より夜ふけまて

日法中熊くて麻ある表かな　仝

聖妖物

岸形にやはらの流く表かな　呂波

二新茶屋にて

つま櫛の先ハ菊たまりや木の花ゑ　淡々
おもかす海しー薬子をすゝ於　嘯雪

菅遊晋子

新武作尚して酒らん月と書　淡々

指掌画賛

ふるくと固鎖まきゝ小萱とる書　仝

玉泉禅師乗拂之时

風うまか雲の旌の枯尾花　仝

佛骨表

志ありくハ嘔哉おりも韓退之　元甫

夫婦

袴きて紀も嫁出ぬ日もなかれや　仝

隆達の月夜烏の文化か

秋ハこの月夜烏ハ川もなく　鬼貫

人丸の訴ゆべきまじ子

家遠く心も戴うる在子常　鯉水

こは在なりて

尾端すこ紀も力くゝく夕涼と　萬羅

深草

つらく乃ちもとる跡も杉ゝ哉　仝

第63328号 受入 昭36. 14

田文

志ら雪はきゆるに春雪跡もなし　一茶坊

鴫のこゑや月なく鳴つ暮の岸　東壷

物之名

臼杵 薪水

跡ふきるゝやうすき袖まきふみつる月　一茶坊

温飩 蕎麦 焼餅

雲みえしともうたもやきて手はる月　仝